

20世紀初頭のハプスブルク帝国海軍と東アジア
——寄港地交流を通じた帝国主義世界への参与——

大井 知範

本稿は、およそ100年前にハプスブルク帝国の軍艦が東アジアの海域に駐留していた史実をたどることで、大陸帝国としての歴史像を帯びたハプスブルク帝国にも海を渡るグローバル国家としての一面があったことを明らかにする。西洋の在外海軍の歴史は、従来、軍事的抗争の駒や非西洋世界に対する帝国主義の手段という観点から研究が行なわれてきた。しかしここでは、海外で活動する軍艦が持つもう一つの意義、つまり平時の日常世界において「関係性」を構築する媒体として軍艦が果たしていた役割に注目する。

第1章では、欧州域外における軍艦の常駐体制（ステーション体制）を取り上げ、ハプスブルク帝国の軍艦が東アジアに配備されることになった理由と経緯、ならびにその常駐体制の中身を概観する。第2章では、外地に派遣される軍艦が持つ役割のなかでも特に重要度が高い居留民と通商の保護をハプスブルク帝国のステーション艦がどのように遂行していたかを見る。居留民や経済的な在外権益が乏しく、軍艦1隻のみの常駐という同国の特殊事情ゆえ、他の列強のような直接保護の体制がとられていないことがそこから明らかになる。第3章では、日常において最も基本的なルーティンとして重視されていた親善交流を取り上げ、ハプスブルク帝国のステーション艦の本質的な意義を探る。第4章では、ステーション艦に随伴した軍楽隊に焦点を当て、ハプスブルク帝国が音楽を通して東アジアの沿海社会に関わり、この地域と一体化する試みを明らかにする。ハプスブルク帝国は、こうした日常における多様な活動を丹念にこなし積み上げていくことで、列強の一員として東アジア帝国秩序に溶け込もうとしていたのである。